

『万葉集』における〈恋愛〉メタファーに関する研究 —認知メタファー理論の観点から—

A Study on the Metaphors of Love in the Manyoshu: From the Perspective of Cognitive Metaphor Theory

路 浩 宇* 韓 涛** 彭 語 心***
LU Haoyu HAN Tao PENG Yuxin

要 旨

『万葉集』は日本最古の和歌集である。当時の人々は、〈恋愛〉という抽象概念をどのように捉えているのだろうか。また、そこにはどのような特徴が見られるのだろうか。本稿ではこれらの問題をめぐり考察を試みた。具体的には『万葉集』から〈恋愛〉に関する和歌358首を抽出し大堀（2002）の分類基準に基づいて分析した。その結果、『万葉集』における〈恋愛〉メタファーは大きく慣習的メタファーとイメージ・メタファーに大別できることが明らかになった。また、万葉人が〈恋愛〉を表すのに自然物のイメージ・メタファーを好んで用いたり、悲観的なものを用いたり、さらに中国文化の影響を受けたりするといったことも解明された。

キーワード:『万葉集』、恋愛、概念メタファー、慣習的メタファー、イメージ・メタファー

* ろこう、九州国際大学現代ビジネス学部 国際社会学科准教授、h-lu@cb.kiu.ac.jp

** かんとう、北京外国語大学 日語学院准教授、hantao@bfsu.edu.cn

*** ほうごしん、北京外国語大学 日語学院院生、pengyuxin2016@163.com

1. はじめに

『万葉集』は日本に現存する最古の歌集であり、これまで『万葉集』における恋歌についてはしばしば論じられてきた。例えば古橋（1987）では『万葉集』における大量の恋歌を例に、当時の人々の恋愛生活の実態を解明し、われわれ現代人が持つ〈恋愛〉¹とは異なる観念を持っていることが明らかにされている。しかし、〈恋愛〉は一種の抽象的概念として五感を通してそれを直接理解したり解釈したりすることはほとんど不可能に近い。例えば、われわれは〈恋愛〉という抽象的なものを直接手に取ってその色や形を見たり触れたり、〈恋愛〉に関する表現を直観したりすることはできない。従って伝統的な修辞学の観点からでは、このような問題を解決するのは難しい。そこで本稿では、Lakoff & Johnson（1980）などにより確立された認知メタファー理論（conceptual metaphor theory、以降CMTと略す）を援用し、『万葉集』における〈恋愛〉メタファー²を考察することにする。具体的にはCMTの観点から、『万葉集』における恋愛表現を収集し、〈恋愛〉という抽象的概念が当時の人々にどのようにメタファー的に概念化されているのかを探ってみる。また、そこにはどのような特徴が見られるのかといった点についても合わせて究明したい。なお、本稿で扱われる訓読文はすべて『万葉集』（『新編日本古典文学全集』1994、小学館）に準拠し、そして和歌の解釈も同書に依拠することにした。

2. 先行研究及びその問題点

2.1 『万葉集』に関する日本側の研究

まず、民俗学的観点からは、当時の人々の習慣を明らかにするには古代人の世界観に立って把握する必要があるという考えが前提となっている。例えば、古橋（1987）では、当時の恋愛生活に関する具体的なルールに着目しており、結婚の起源神話、出会いや逢引の使い・時間・場所、恋の通い道、共寝の

時の手続き、恋に関する呪術、恋の終わりなどを明らかにしている。そのうえで『万葉集』の歌が表している恋愛生活は当時の人々の宇宙観、いわば神々の意志に従うことに支えられているという結論が得られている。これに対し櫻井(1995)では、恋の場について基本的に神の保証の下に置かれているものであると主張し、婚姻に関する言葉を中心に万葉時代の婚姻相を考察している。

また、文芸史の観点から、恋歌がいかに成立したかについて研究したものとして辰巳(1997)や大谷(2016)などが挙げられる。辰巳(1997)では、中国少数民族の歌謡から「歌路」という定式を発見し、そのシステムに基づき『万葉集』の恋歌について体系的な説明を試みている。これに対し、大谷(2016)では〈古物語り〉から〈今物語り〉へという『万葉集』の恋物語りの変化について研究し、次のことを明らかにしている。〈古物語り〉とは、いわゆる伝説歌と呼ばれ、古くから語り継がれてきたもの、または『万葉集』が成立する遥か以前から伝えられ、ある型を持ちながら恋歌の基盤を形成してきた歌を指すという。これに対し、〈今物語り〉は、一種の恋歌ではあるが、当時の人々にとって近い世を舞台にし、実在したと考えられる人物を主人公とする歌である。そのうえで、大谷(2016)では恋歌に用いられる漢語、仏典用語など特殊な用語に注目し、男女の愛がいかにして特殊用語と呼応しつつ物語りとして形成されたかを研究している。そこから、〈古物語り〉の再生と継承の方法、〈古物語り〉から〈今物語り〉への展開、さらに〈今物語り〉の成立を人間の愛の獲得という過程として論じられている。

さらに、言語学的観点から、和田(1996: 241-242)では古典日本語の象徴表現に焦点を当てながら、『万葉集』の恋歌、具体的には「耐えきれない思いや命までも消え入りそうな恋を詠む表現、絶えずつる春草・夏草が繁茂するように我心を占有する恋を詠む表現」などについて詳細に分析している。「恋し」より相手を求め執着する行為を表す「恋ふ」が愛用されることと、八代集より切実な恋の表現が存在するといった特徴が明らかにされている。このように、『万葉集』の恋歌における恋愛表現は古代日本人の〈恋愛〉の捉え方を反映して

いると考えられる。

2.2 『万葉集』に関する中国側の研究

中国の万葉集研究と近年の日本の研究を比べてみると、中国の研究論文の中に、『万葉集』と中国文学との対照研究が多く見られる。

まず、中西・王（1995）では『万葉集』『詩経』をはじめとする中日詩歌で用いられた風、雨、雪、川、山、月、花、木といったイメージを比較分析した。それによれば万葉時代から和歌では、よく中国詩で自然物が象徴しているものを用いて気持ちを伝えたと述べられている。一方、尹允鎮（2005）では、『万葉集』と中国文学との関連性及び万葉歌人の創作と中国文学との関連性について論述されている。赖国文（2012）では、万葉時代の歌人が梅を雪、柳、鶯と取り合わせるのは、中国古代の詩歌の影響を受けたからであると主張されている。ここからわかるように、『万葉集』で使用されているイメージを研究しようとするならば、中国文化の影響は無視することができないと考えられる。

次に、张继文（2009）では認知言語学の視点から日本古典短歌を考察している。具体的にはメタファーは概念領域間の構造的拡張であるという立場から、唐詩・短歌における概念メタファーを、空間・構造・存在・共感・擬人の5つのメタファーに分類し、中日古典詩歌のメタファーの基盤として、感覚的・知的・感性的な営みである認知的基盤と、人間のさまざまな経験からなる経験的基盤という二つを提起している。このように、张继文（2009）の試みは、認知言語学の視点から日本の古典学を理解する際、重要なものであるといえる。

ここまで日本側と中国側の研究について概観してきたが、『万葉集』の恋歌に関する先行研究はかなりの数があり、そして多岐にわたることが明らかになった。例えば、日本での研究は、民俗学や、文芸史、象徴表現の分析、イメージ分析が主流であるのに対して、中国での研究は主に中日対照研究、特に万葉集が如何に中国文学の影響を受けたかに研究の焦点が置かれている。しかし、これまでの研究は言語表現、芸術手法への分析にとどまっており、〈恋

愛〉メタファーに関する研究は管見の限り少ないようである。

3. 理論的枠組み

3.1 認知メタファー理論とは

CMTはLakoff & Johnson (1980) などにより確立されているとされており、メタファーは単なる「言葉のあや」(figure of speech)であるという伝統的なメタファー観を否定し、人間の認知機構の本質をなすものであるという新しいメタファー観を提唱している。その後、CMTはプライマリー・メタファー理論(Grady1997)やブレンディング理論などを経て、今日に至っている。ここで注意しなければならないのは、伝統的な修辞学とは異なり、CMTにおいて「メタファー」という場合、普通、認知機構としての「概念メタファー (conceptual metaphor)」を指し、その存在を示す具体的な言語表現は「メタファー表現 (metaphorical expressions)」と称して明確に区別されることが多いという点である(韓濤2017)。

3.2 メタファーの分類

これまでメタファーの分類について様々な考察がなされてきた。Lakoff & Johnson (1980) では「方向のメタファー」(orientational metaphor)、「存在のメタファー」(ontological metaphor)、「構造のメタファー」(structural metaphor)の3つを提案しているが、「類似メタファー」(resemblance metaphor)、「相関関係メタファー」(correlation metaphor)、「基本メタファー」(primary metaphor)というGrady (1997)の分類や、「名詞メタファー」、「述語メタファー」、「助詞メタファー」、「副詞メタファー」という東定芳(2000)の分類もあった。これらに対し、大堀(2002)ではメタファーを「慣習的メタファー」(conventional metaphor)、「汎用メタファー」(generic metaphor)、「イメージ・メタファー」(image metaphor)、「詩的メタファー」(poetic

metaphor) の4つに分類している。そして、大堀(2002)の分類方法に基づき韓濤、吳涵或(2021)では、日本文学における〈恋愛〉メタファーを論じ、文学作品における大堀(2002)の有効性が検証された。このことを踏まえ本稿では大堀(2002)の分類に従い、慣習的メタファーとイメージ・メタファーを中心に考察していく。

4. 『万葉集』における〈恋愛〉の慣習的メタファー

『万葉集』には〈恋愛〉の慣習的メタファーが全部で13種類観察された(表1参照)。以下、その中からいくつかを取り上げてメタファー表現と写像関係を中心に見ていく。

表1 『万葉集』における〈恋愛〉の慣習的メタファーの分類

メタファー	数
《恋愛は植物》	21
《恋愛は火》	8
《恋愛は糸》	6
《恋愛は旅》	7
《恋愛は命》	47
《恋愛は力》	3
《恋愛は連続体》	19
《恋愛は隠れるもの》	23
《恋愛はペアとなるもの》	13
《恋愛は病気》	4
《恋愛は苦しいもの》	5
《恋人は所有物》	6
《恋愛は容器・内容物》	9
合計	171

4.1 《恋愛は植物》

〈恋愛〉という抽象的概念を表すのに〈草〉や〈花〉のような〈植物〉はよくメタファーの起点領域として用いられる(韓濤、付林瑶2019、韓濤、彭語心2021)。次の例(1)に示されているように、『万葉集』には「花が咲く」ことを通して「恋に落ちる」という気持ちを表し、「実がなる」ことを通して「結婚する」を表す恋歌が多く見られる。

(1) 玉葛 花のみ咲きて 成らざるは 誰が恋ひならめ 我は恋ひ思ふを
(巻2・102)

例えば、上の例(1)では「玉葛のように、花だけ咲いて、実がならないのはどなたの恋のことだろう、私はこんなに恋しく思っているのに」という意味を表している。玉葛を引いたのは、雌雄異株のビナンカズラの雄花は花だけ咲くが、実がならないことが念頭に置かれているからであろう。

(2) はしきやし 我家の毛桃 本繁み 花のみ咲きて 成らざらめやも (巻7・1358)

(3) 息の緒に 思へる我を 山ぢさの 花にか君が うつろひぬらむ (巻7・1360)

また、例(2)の「花のみ咲て成らざらめやも」は「あだ花だけで実らずじまい」といったような、「必ず愛を実らせて見せる」という決意を表している。さらに、この歌は「かわいらしい我が家の毛桃は、根本からしっかり茂っているので、花だけ咲いて実らずじまいということがあろうか」という意味である。本繁みは、根本近くから出た小枝が多いことで、本心から絶え間なく思い続けていることのたとえである。これに対し、例(3)は「命がけでわたしは愛しているのに、山ぢさのようにあなたはあだ花で、もう気が変わってしまったのだ

ろうか」という意味で、花が散ってしまうことと愛情が衰えてゆくことを二重写しにしている。

そして、次の例（4）は「花のみ咲てならずかもあらむ」で、「一時的な関係に過ぎず、結婚までに至らないのではないか」という不安を伝えるのである。

（4）見まくほり 恋ひつつ待ちし 秋萩は 花のみ咲きて 成らずかもあらむ（巻7・1364）

また、次の例（5）や（6）を見ればわかるように、『万葉集』では絶え間なく思うことを葉・枝の茂りに喩えたりする傾向が見られる。そしてその理由については和田（1996）では『万葉集』の「繁き恋」「恋の繁き」「恋は繁き」等は、春草や夏草がはびこり、繁茂する様子を我が恋に重ねているという特色が認められると指摘されている。

（5）うつせみと 思ひし時に 取り持ちて 我が二人見し 走り出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 繁きが如く 思へりし 妹にはあれど…（巻2・210）

（6）恋草を 力車に 七車 積みて恋ふらく 我が心から（巻4・694）

例えば、例（5）では、絶えず思うことを春の葉の茂りに喩えられており、例（6）には恋草という言葉があり、いくらは払い除こうとしても一向に減退させず、むしろ蔓延る一方の思いを草の生き茂るしつこさに喩えられている。さらに、『万葉集』では「恋フ・恋・恋シ」は一般に、目前にない人に心惹かれ、会いたく思う場合に用いられるが、稀に、同居するなどして相手が眼前にいるときでも、飽きることなく愛して、それらの語が用いられることがある。

（7）我妹子が やどの秋萩 花よりは みになりてこそ 恋まさりけれ（巻

7・1365)

(8) 我妹子が 形見の合歡木は 花のみに 咲きてけだしく みにならじ
かも (巻8・1463)

(9) 卯の花の 咲くとはなしに ある人に 恋ひや渡らむ 片思にして (巻
10・1989)

例(7)は、結婚できて幸せいっぱい気持ちを詠んだ歌であるのに対し、例(8)は、花だけ咲いて実を結ばないというのは、あなたの私に対する愛情は一時的なものではないだろうかというメタファー的な意味を表す歌である。一方、例(9)には「咲くとはなしに」という表現があり、この「咲く」は男女が関係を結ぶということをメタファー的に表していると考えられる。

なお、以上の議論を踏まえ、『万葉集』における《恋愛は植物》のメタファー的写像関係を、次の表2のように示す。

表2 《恋愛は植物》における写像関係

起点領域：〈植物〉	目標領域：〈恋愛〉
蕾	恋心を秘める
花が咲く	恋愛関係を結ぶ
花が散る	恋が衰える
実がなる	結婚する
枝・葉の繁き	愛情が増す

4.2 《恋愛は火》

これまでの研究により明らかにされているように、〈火〉という概念は、よく〈恋愛〉や〈怒り〉などの感情をメタファー的に特徴づけるのに用いられる(韓濤2009)。これは〈火〉は熱くて熱烈な物であり、いったん燃え出すとコントロールしにくく、人に痛みを与える可能性があるためであろう。『新編日本

古典文学全集 万葉集①』（1994、小学館）では「燃えつつそ居る」という表現の意味を「このモユは恋しさのあまりに心が熱くなること」（p353）というように解釈しており、〈火〉の燃焼の熱さと恋しさで感じた熱意の類似性を述べている。

以下、具体例を交えながら、『万葉集』ではどのように〈火〉を通して〈恋愛〉をメタファー的に概念化しているのかを見てみる。

(10) 我妹子に 恋ひすべ無がり 胸を熱み 朝戸あくれば 見ゆる霧かも
(巻12・3034)

(11) 思はぬに 妹が笑まひを 夢に見て 心の内に 燃えつつそ居る (巻4・718)

(12) …たまほこの 道をた遠み 間使ひも 遣るよしもなし 思ほしき
ことつてやらず 恋ふるにし 心は燃えぬ… (巻17・3962)

(13) 冬ごもり 春の大野を 焼く人は 焼き足らねかも 我が心焼く (巻7・1336)

(14) 我が心 焼くも我なり はしきやし 君に恋ふるも 我が心から (巻13・3271)

(15) なかなかに なにか知りけむ 我が山に 燃ゆる火の気の 外に見ましを (巻12・3033)

例(10)では、〈火〉の〈燃焼〉にメタファーの焦点が置かれ、あの娘が恋しくてたまらず、胸が燃えるように熱くなる感覚を描いている。同様に、例(11)と(12)の「心は燃ゆ」という表現も「恋しさのあまりに心が熱くなる」という意味である。また、火に焼かれるものが焦げるのを熱く焦れる思いにかける歌もある。例えば、例(13)と(14)の「こころ焼く」は「恋で焦がれている」という意味である。そして、われわれが持つ百科事典的知識の中には「火は危険性が高いもので、近づくとその熱さに傷つけられる」というものがある。

〈火〉の持つこの特性が、恋に落ちると心が傷つけられることを表すのに用いられうる。例えば、例(15)は燃える煙を見るように、恋人を遠くから見れば自分の心は思いに苦しいことはなくなるという嘆きを表している。以上のことから、万葉の人々が〈火の燃焼〉〈火の熱さ〉〈火の危険性〉といった〈火〉の構造を通して〈恋愛〉をメタファー的に理解していることがわかった。

以上の議論を踏まえ、『万葉集』における《恋愛は火》のメタファー的写像関係を、次の表3のようにまとめることができる。

表3 《恋愛は火》における写像関係

起点領域：〈火〉	目標領域：〈恋愛〉
火が燃える	恋が激しい
火の熱	恋に対する熱意
火が消える	恋が途絶える
火の危険性	恋の危険性

4.3 《恋愛は糸》

恋を糸に喩えることは個別の文化を超えて用いられていると考えられる。例えば古代中国から、恋人の二人は赤い糸に結ばれているという言い伝えがあり、日本語には「縁を結ぶ」「縁を切る」といった言い方で、二人の関係性を糸に喩えている。万葉人の場合、糸は恋心を表すのに用いられ、〈糸〉の結ぶ、切る、乱れることはそれぞれ〈恋愛〉の状態にメタファー的に対応されているといえる。

(16) 我妹子に 恋ひて乱れば くるべきに 掛けて縋らむと 我が恋ひそめし (巻4・642)

(17) 世の中は 常かくのみか 結びてし 白玉の緒の 絶ゆらく思へば (巻7・1321)

- (18) 葦の根の　ねもころ思ひて　結びてし　玉の緒といはば　人解かめや
も（巻7・1324）
- (19) 河内女の　手染の糸を　くりかへし　片糸にあれど　絶えむと思へや
（巻7・1316）
- (20) 照左豆が　手にまきふるす　玉もがも　その緒は替へて　我が玉にせ
む（巻7・1326）
- (21) 玉の緒を　片緒に縊りて　緒を弱み　乱るる時に　恋ひずあらめやも
（巻12・3081）
- (22) 恋ふること　増されば今は　玉の緒の　絶えて乱れて　死ぬべく思ほ
ゆ（巻12・3083）

例えば、例(16)は恋心の乱れを〈糸〉の乱れにたとえている。例(17)では「結ぶこと」と「愛を誓うこと」とが二重の意味になっている。例(18)では、「玉の緒」が愛する男女の堅い絆のたとえとなっている。「玉の緒」はすなわち「宝玉」を意味する「玉(たま)」が、同音の「魂(たま)」にかけられ、「その宝玉(=魂)を突き通す紐」によって、「愛する男女の心同士が固く結ばれていること」をも意味している。例(19)の片糸は片思いの喩えである。普通の〈糸〉は2本縊り合わせてあるに対して、一本だけを入れた片緒は切れやすい。例(20)は「それでも決して絶えることがない」という強い意志の伴った恋心を表現している一方で、例(21)は片恋の不安な気持ちを伝えている。例(22)は、玉の緒が切れると、恋の〈糸〉が切れたことで心が乱れていることを表している。

以上の議論を踏まえ、『万葉集』における《恋愛は糸》のメタファー的写像関係を、次の表4のように示す。

表4 《恋愛は糸》における写像関係

起点領域：〈糸〉	目標領域：〈恋愛〉
糸を結ぶ	恋愛関係を結ぶ
糸を切る	恋が途絶える
糸が乱れる	恋心が乱れる
片糸	片思い

4.4 《恋愛は旅》

『万葉集』より後に書かれた『後撰和歌集』や『落窪物語』といった作品の中では、恋いつつおくる日々を道に喩えている「恋路」という言葉が登場することがある(古橋1987)が、この言葉は《恋愛は旅》というメタファーに動機づけられているといえる。ここで注意してほしいのは、このメタファーは、それらの作品よりも古い万葉集の時代から用いられてきたという点である。例えば、

(23) 海原の 路に乗りてや 我が恋ひをらむ 大船の ゆたにあるらむ
人の兒故に(巻11・2367)

(24) 我が後に 生れむ人は 我が如く 恋する道に あひこすなゆめ(巻
11・2375)

例(23)は大海原の船路に乗り出してゆらゆらと揺られているような気持ちを恋で不安な気持ちに喩えているのに対し、例(24)では、恋の苦しみやおぼつかないさを不案内な道に喩え、自分より後に生れる人は、自分のように恋という苦しい道に陥らない方がよいことを表している。

また、『万葉集』には恋の逢う道を描く歌が数多くある。恋は非日常なものであるから、逢い引きした道の日常と異なった道を選んでいる。そのためか、わざわざ遠回りをする場合もある。

(25) 春霞 めのえゆただに 道はあれど 君に逢はむと たもとほりくも
(巻7・1256)

(26) 直に来ず こゆこせぢから 石橋踏み なづみぞ我がこし 恋ひてす
べなみ (巻13・3257)

例(25)は「井のそばを通過して真っ直に行ける道はあるが、あなたに逢おうと遠まわりして来た」と歌い、「普通の道があるのに、逢い引きの場合はあえて遠回りする道を通う」という考え方を表している。例(26)は、まっすぐに来ずに、ここから来るという巨勢道を通して飛び石を踏み苦勞して私は来たといい、まっすぐに来ないで遠回りしてきたことを歌っている。

なぜ逢い引きをするときはわざわざ苦勞して来なければならないのだろうか。古橋(1987:144)は「恋愛とは異なった性の、違った存在である二人が一つになるという不思議なものだから、そこに至るまでたいへんな苦勞をすることで、日常性を払拭しなければならなかったのである」と説明している。つまり、苦勞してきた道は恋愛するために経験しなければならない試練である。一見すると逢いに行く道の苦勞を述べているが、実は恋の大変さを伝えようとしている自分の恋愛で生じる感情は荷物に喩えられている。例えば、例(27)は「片思いを馬に背負わせて越中に届けたら、あなたも少しは心を寄せてくださるだろうか」という意味である。

(27) 片思を 馬にふつまに 負ほせもて 越辺に遣らば 人かたはむかも
(巻18・4081)

以上の議論を踏まえて、『万葉集』における《恋愛は旅》というメタファーの写像関係は、次の表5のようにまとめられる。

表5 《恋愛は旅》における写像関係

起点領域：〈旅〉	目標領域：〈恋愛〉
出発点	恋愛の開始
旅道	恋愛の過程
旅行者	恋愛する人
荷物	恋愛で生じた思いなどの感情
旅の終わり	恋愛の終結

5. 『万葉集』における〈恋愛〉のイメージ・メタファー

結論を先取りすると、『万葉集』の中で用いられているイメージは大きく〈自然物〉〈植物〉〈動物〉〈呪術〉〈身の回り〉という5つの領域に分けられるということが明らかになった。なお、『万葉集』における〈恋愛〉のイメージ・メタファーの種類は、およそ次の表6のように示すことができる。

表6 『万葉集』における〈恋愛〉のイメージ・メタファーの分類

類別	イメージ	用例数
〈自然物〉	〈月〉〈夜〉〈雲〉〈霧〉〈川〉〈雨〉〈雪〉〈天の川〉 〈砂〉〈波〉〈潮〉〈水無川〉〈淵〉	86
〈植物〉	〈花〉〈菅〉〈黄葉〉	34
〈動物〉	〈ホトトギス〉〈鶴〉〈雁〉〈鹿〉	47
〈恋の呪術〉	〈袖〉〈髪〉	9
〈身の回り〉	〈紐〉〈枕〉〈染め〉	11
合計	25 種類	187

5.1 〈自然物〉

5.1.1 〈月〉〈夜〉

万葉時代の逢い引きは夕に逢い、朝に別れるものである(古橋1987)。いわ

ゆる妻問婚である。男は夜通い朝帰って、昼間は仕事をするが、男性が毎晩女性のところに通うということではない。

(28) よしゑやし 恋ひじとすれど 秋風の 寒く吹く夜は 君をしそ思ふ
(巻10・2301)

(29) ある人の あな心なと 思ふらむ 秋の長夜を 寝きめ伏すのみ (巻10・2302)

このことは上の例(28)のような、夜に一人で相手のことを思う寂しさを伝える歌、または例(29)では夜なのに相手を通して欲しない恨みを歌う歌からも窺える。

(30) 春日山 霞たなびき 心ぐく 照れる月夜に ひとりかも寝む (巻4・735)

(31) 月夜には 門に出で立ち 夕占問ひ 足占をそせし 行かまくを欲り
(巻4・736)

これに対し、例(30)は「春日山に霞がたなびき、晴れやらずおぼろ月夜にひとり寂しく寝ることだろうか」という意味で、月の夜なのに、一人寝しなくてはならない嘆きが歌われている。一方、例(31)は月の夜だからあなたのところへ行こうとしたと書かれている。ここからは、逢い引きは常に月の夜にしているということが読み取れる。

そして、逢い引きは原則的に月の夜に限るということは古橋(1987)にも指摘されている。即ち愛し合う男女が逢う夜に、男性がいつも月の光を浴びながら、女性の家に行き、女性は必ず月を眺めて男性を待っているという。以上からわかるように、〈月〉や〈夜〉が万葉時代の〈恋愛〉を理解するうえで欠かせないイメージであるといつてよい。

また、月が高い雲の上にあるため、人は近づくことができず、遠くから眺めるしかできない。従って、『万葉集』にはよく近づけない恋人への想いを月に寄せてたとえるという傾向が見られる。例えば、

(32) 秋の夜の 月かも君は 雲がくり しましく見ねば ここだ恋しき
(巻10・2299)

(33) 君を思ひ 我が恋ひまは あらたまの 立つ月ごとに よくる日も
あらじ (巻15・3683)

例(32)は「君は秋の夜の月だろうか。雲に隠れるようにしばらく見ないと。こんなにも恋しいとは」という意味で、恋人を偲ぶ心を月を慕う心に喩えて詠まれている。また、月出は休むことなく毎日繰り返しているから、自分の思いは月出のように終わることはないということを伝える歌もある。例(33)はあなたを思って、わたしが恋い慕うことは立つ月ごとに休む日もないほどだろうという意味である。自分の〈恋愛〉を月が昇ることのような終わりのないものに喩えている。

5.1.2 〈川〉

〈恋愛〉を〈液体〉を通してメタファー的に概念化される具体例は洋の東西を問わず様々な言語において観察されうる。例えば、中国語における“**坠入爱河**”(恋の川に落ちる)や英語における“fall in love”といった慣用句がその一例である。その意味で『万葉集』も例外ではない。例えば、次の例(34)や(35)に見られるように、『万葉集』では絶えず流れ行く〈川〉を通して〈恋愛〉の気持ちを特徴づけることができる。

(34) あしひきの 山下とよみ ゆく水の 時ともなくも 恋い渡るかも
(巻11・2704)

(35) 明日香川 水行きまさり いや日けに 恋のまさらば ありかつまし
じ（巻11・2702）

例(34)では「山下を響かせて流れる水のように、時を分らず恋し続ける」と詠まれており、水が増すことを恋がつのることにかかる歌である。一方、例(35)では「明日香川の水かさが増すように日増しに恋がつのる」という嘆きが詠まれており、〈液体〉は流れることができ、そしてその流れが何らかの原因で淀む可能性もあるということが読み取れる。

5.2 〈植物〉

〈花〉は美しい外観と良い香りをしており、男性が女性と交際する間によくプレゼントするものとされている。そして『万葉集』における〈花〉はただ美しいだけでなく、〈恋愛〉といった意味も持つとされている（中西1986）。例えば、例(36)は「春咲く花を折り持っては、際限もなく恋しく思い続けることよ」という意味を表しており、花束に思いを寄せているということが読み取れる。

(36) 冬ごもり 春咲く花を 手折り持ち 千度の限り 恋ひ渡るかも（巻
10・1891）

ここで注意しなければならないのは、和歌を歌う際、季節によって喩えられる〈花〉の種類も異なる。以下では、具体的にどのような種類の〈花〉が用いられているのか、〈花〉の下位レベルに焦点を当てながら検討していく。

〈桜〉は万葉時代より人に愛されている。その薄く小さな花びらや、浅いピンク色、一瞬咲いて散る短い花期などの可憐さに心が惹かれる。

(37) あしひきの 山桜花 ひならべて かく咲きたらば はだ恋ひめやも
（巻8・1425）

(38) この花の 一枝のうちに 百種の 言そ隠れる 凡ろかにすな (巻8・1456)

例えば、上の例(37)では「花期が短いからこそこんなに恋しく思う」ということが書かれている。ここから〈桜〉の短い美しさを〈恋愛〉の貴重さに見立てられていることがわかる。また、〈花〉を相手に捧げることで自分の恋しさを表すことができるように、例(38)では「桜の一枝に自分の百千のこぼさを入れて、自分の思いの深さ」を表しているといえる。

また、〈萩〉という花は見た目が地味で、たとえ咲いても人の注意を引かないことが多いが、日本では古くから愛されてきた〈花〉の一種である。〈萩〉は小さな花しか咲かないにも関わらず、満開すると花の重みで枝がたわむということがあります、その強さは人々に感動を与えるであろう。このような〈萩〉は背後から黙々して夫を支えている妻に連想させられるであろう。そのため、『万葉集』では〈鹿〉と〈萩〉を夫婦に喩えたり、〈秋萩〉を妻に見立てたりする歌が多く見られる。

(39) 秋萩に 恋ひつくさじと 思へども しゑやあたらし またも逢はめやも (巻10・2120)

(40) ますらをの 心はなくて 秋萩の 恋のみにやも なづみてありなむ (巻10・2122)

(41) 萩の花 咲きのををりを 見よとかも 月夜の清き 恋まさらくに (巻10・2228)

例えば、上の例(39)(40)からは〈秋萩〉を恋人に擬人化して、〈秋萩〉への思いを伝えていることがわかり、例(41)からは〈秋萩〉が盛んに咲いている姿を〈恋愛〉に喩えて詠っていることがわかる。

さらに、中国文化の影響により、万葉の頃は、〈桜〉よりも〈梅〉の方が好ま

れているという傾向があった。例えば、例（41）は、〈梅〉を〈女性〉に喩え、「咲きて散りぬ」で若い娘が成人して人妻になったことを表している。また、例（42）では「みんな咲いている中で、梅の花が蕾のままなのは、恋い悩んで引っ込んでいるのだろうか、それとも雪を待っているのか」ということが書かれている。恋心を引きこもることを梅の花は他の花と一緒に咲かず、蕾んでいることに喩えていることがわかる。

（41）梅の花 咲きて散りぬと 人は言へど 我が標結ひし 枝ならめやも
（巻3・400）

（42）梅の花 咲けるがなかに ふふめるは 恋やこまれる 雪を待つとか
（巻19・4283）

5.3 〈動物〉

5.3.1 〈ホトトギス〉

ホトトギスの親鳥が他の鳥の巣に自分の卵を産んで、育てさせるという習性を持つ。そのため、万葉時代の人々は親に捨てられたホトトギスの小鳥を見て「孤独」や「哀れ」という感情が湧き同情を寄せる。それが故に、当時の人は一人で旅に出て、孤独と感じる時はよく〈ホトトギス〉に託して恋人に対する思いを伝えたのである。

（43）旅にして 妻恋すらし ほととぎす 神名備山に さ夜ふけて鳴く
（巻10・1938）

（44）暇無み 来ざりし君に ほととぎす 我かく恋ふと 行きて告げこそ
（巻8・1498）

例えば、上の例（43）では「ホトトギスが一時的に神奈備山に滞留し、家に残してきた妻を思って鳴いているのだ」ということが書かれている。また、恋

の使いとして歌われる〈ホトトギス〉の例も見られ、例(44)では「暇がないとお見えにならなかった君に、ほととぎすよ、わたしがこんなに恋しがっていると行って知らせておくれ」ということが書かれている。

5.3.2 〈鶴〉

〈鶴〉というイメージを使って〈恋愛〉を伝える場合、夜明けの鶴の鳴声を詠む歌が最も多い。妻問婚という文化では、夜明けは恋人と別れることを意味するからである。それが故に、当時の人々はよく鶴の声に託して恋人を思う辛さを伝える。例えば、次の例(45)では「夜明け方に鳴いている鶴の声を聞いて、あれも自分と同じように妻恋しているのだろうと思ったこと」を伝えており、例(46)における「妻呼びかはし」は、「鶴が配偶者を呼び合う」ことを指し、夫婦仲が良いことの比喩であると考えられる。

(45) 今夜の 暁くたち 鳴く鶴の 思ひは過ぎず 恋こそ増され(巻10・2269)

(46) 湊風 寒く吹くらし 奈呉の江に 妻呼びかはし 鶴さはに鳴く(巻17・4018)

同様のことは中国文学においても見られる。例えば、水鳥に託して夫婦関係を表す歌として、『詩経』の「关雎」などが挙げられる(闫秀2020)。

5.3.3 〈鹿〉

交尾期の雄鹿の喉はただれたように脹れ、唸るようなダミ声でヒョヒョヒュと鳴く。例(47)が示したように、雄鹿が鳴ると、雌鹿はその声に引かれて多く集まっていくという鹿の習性がある。従って、男性が雄鹿の声を聞くと、鹿は妻と一緒にいることができるが自分は恋人に会うことができない辛さが増すのだろう。例えば例(48)は「君に恋してしょんぼりしている時、敷の野の秋

萩を押し分けて、雄鹿が鳴く声が聞える」という意味である。例(49)は「萩の恋しさも止まないのに、雄鹿の声が続いて聞え、人恋しさが増すよ」という。また、5.2で前述したように、萩は鹿の妻と見なされるため、例(50)は、雄鹿が萩の散りゆくを見て、気がめいり妻恋いするのであろうかという、鹿を借りて自分の妻への思いを伝える。

(47) さ雄鹿の 妻ととのふと 鳴く声の 至らむきはみ なびけ萩原(巻10・2142)

(48) 君に恋ひ うらぶれ居れば 敷の野の 萩萩しのぎ さ雄鹿鳴くも(巻10・2143)

(49) 萩萩の 恋もつきねば さ雄鹿の 声い継ぎ継ぎ 恋こそ増され(巻10・2145)

(50) 萩萩の 散り過ぎゆかば おほほしみ 妻恋すらし さ雄鹿鳴くも(巻10・2150)

5.4 〈恋の呪術〉

5.4.1 〈袖〉

日本では寝る時に袖の一部分を折り返しておく夢の中で恋人に会えるという俗信があるとされている(『万葉集』③、pp278-279)。例えば、次の例(51)は「あなたが恋しくてたまらず袖を折り返して寝たの다가夢に見えた」ということを詠っており、例(52)も「袖を折り返して寝ているせいか、あの子の姿が夢に見た」ということを伝えている。そして、再び会えるために、袖を折り返すという呪術があるように、例(53)のような無事の再会を願っているものも見られる。

(51) 我妹子に 恋ひてすべなみ 白たへの 袖かへししは 夢に見えきや(巻11・2812)

(52) 白たへの 袖折りかへし 恋ふればか 妹が姿の 夢にし見ゆる (巻12・2937)

(53) …しろたへの 袖折りかへし ぬばたまの 黒髪敷きて 長きけを
待ちかも恋ひむ はしき妻らは (巻20・4331)

5.4.2 〈髪〉

〈髪〉は体の重要な一部であり、〈恋愛〉を表す際にしばしば用いられる。特に女性に関しては、その髪の形や色から、その人の年齢や気持ちを読み取ることができる。そのため、『万葉集』では〈髪〉を通して恋人への思いを表す歌がよく見られる。

(54) 嘆きつつ ますらをこの 恋ふれこそ 我が結ふ髪の 漬ちてぬれ
けれ (巻2・118)

(55) ぬばたまの 我が黒髪を 引きぬらし 乱れてなほも 恋ひ渡るかも
(巻11・2610)

(56) 置きて行かば 妹恋ひむかも しきたくの 黒髪しきて 長きこの夜
を (田部忌寸櫟子) (巻4・493)

(57) ぬばたまの 黒髪敷きて 長き夜を 手枕の上に 妹待つらむか (巻11・2631)

(58) …ぬばたまの 黒髪敷きて 長きけを 待ちかも恋ひむ はしき妻ら
は (巻20・4331)

例えば、上の例 (54) は「男性を恋い慕いすぎて、結った髪が濡れてほどけたという女性の嘆き」を歌っていると思われる。万葉時代に、結った髪がひとりでに解けるのは相手が自分のことを思っているしるしと考える俗信があるため、作者は自分の思いを〈髪〉に託して詠っている。また、例 (55) では思い乱れたことを髪が乱れたことにかけて詠まれている。そして、例 (56) — (58)

で詠まれている「黒髪敷きて」は男が来るのを待ち侘びて寝る女の様子である。この姿は恋人と共寝する時の姿であり、ひとり寝するところに、思う男を呼び寄せる呪術としての方法であるとされている（古橋1987）。

5.5 〈身の回り〉

5.5.1 〈紐〉

万葉時代は、逢い引きの翌朝、別れ際にお互いの下紐を結びあって、次に会う時までそれを解かないことを誓うという風俗があったといわれている（古橋1987）。そして、この行動パターンは〈恋愛〉を表すのにも用いられている。例えば、次の例（59）は「早く恋人に会えるために紐を解いて待っている」ことを詠っている。そこから、紐が自然に解けることは故郷にいる恋人は自分のことを思っているように理解されうる。

（59）人に見る 上は結びて 人の見ぬ 下紐あけて 恋ふる日そ多き（巻12・2851）

（60）我妹子し 我をしのふらし 草枕 旅のまろねに 下びも解けぬ（巻12・3145）

（61）白たへの 我が紐の緒の 絶えぬまに 恋結びせむ 逢はむ日までに（巻12・2854）

（62）旅の夜の 久しくなれば さにつらふ 紐解きさけず 恋ふるこのころ（巻12・3144）

これに対し例（60）は「家の妻がわたしを思っているらしい。旅の丸寝で、下紐が解けた」ということを詠っていると考えられる。さらに、紐の結びと男女の恋結びとをかけていう歌も見られ、例（61）はその一例である。例（62）からわかるように、「私の下着の紐の緒が切れないうちに、従って恋結びをしておこう」という願いが伝えられているといえる。

5.5.2 〈枕〉

万葉時代には、〈枕〉は男女二人が一つの枕に頭を乗せることが共寝の象徴に相当すると考えられる。栗原(2012:475)が指摘したように、万葉時代の恋愛は自由恋愛であり、結婚する前にセックスをするのは一般的である。つまり、公に認める前に、事実婚が先に達成しているのである。ゆえに、共寝の象徴である〈枕〉は、結婚が公にされていないときの二人の〈恋愛〉を証した。

(63) 妹に恋ひ 我が泣く涙 しきたへの 木枕とほり 袖さへ濡れぬ(巻11・2549)

(64) かくばかり 恋ひむものそと 思はねば 妹が手本を まかぬ夜もありき(巻11・2547)

(65) しるしなき 恋をもするか 夕されば 人の手まきて 寝らむ兒故に(巻11・2599)

上の例(63)は「一人で寝る女性は恋しさで泣いている」ということが詠まれている。そして、普通の枕以外に、当時は「手枕」というものもある。例えば、例(64)では「これほどに恋しくなるとは思わなかったので、あの娘の手枕をしない夜もあった」ということが書かれており、例(65)では「あの女は他人の手枕をして寝ているのだろうという人妻を懸想する男の嘆きである」ということが書かれている。なお、ここでの「手枕」については古橋(1987:175)にも指摘されているように、「実際の行為をした象徴」と考えられる。

6. 『万葉集』における〈恋愛〉メタファーの特徴

以上の考察を通して『万葉集』における〈恋愛〉メタファーの特徴は以下のよ

うにまとめられる。

まず、『万葉集』における〈自然物〉のイメージは13種類もあり、他の種類のイメージより圧倒的に多い。観察された〈自然物〉のメタファー表現は86個あり、その割合が全体の45.7%を占めており最も高い。実は、この点について大窪（1970：171）では「比喩は相聞歌において最も華々しい活躍をする、といってもよいほど、相聞歌の比喩は見事である。ことに自然物が比喩歌の中に占める分量は絶大である」と述べられている。従って、本稿の考察結果は従来指摘されてきている内容をある程度裏づけた形となったといえる。また、〈自然物〉の中に、〈雲〉〈霧〉〈川〉〈雪〉〈雨〉〈波〉〈潮〉〈水無川〉〈淵〉といった〈水〉に関する〈自然物〉が9つもあり、種類が非常に豊富である。このことは日本という島国の自然環境と高度に合致していると考えられる。さらに、興味深い点として〈自然物〉の中で〈月〉〈夜〉〈天の川〉などのように〈夜〉に関するイメージが多く見られるのに対し、「太陽」といった〈昼〉に関するイメージはほとんど観察されないという点が挙げられる。その理由はやはり万葉時代では〈恋愛〉に関わる行動は昼ではなく、夜の時間帯に行われるという当時の習慣と密接に関わっているというところにある。

次に、『万葉集』に見られる〈恋愛〉メタファーは悲観的な（ないしマイナスの評価性を持つ）ものが多いという特徴が挙げられる。西村（1964：2）では、「『万葉集』四千五百余首の中で、恋の歓喜を歌った歌は数えるほどしかない」と述べられており、『万葉集』の恋歌は概ね悲観的な恋の侘び歌であると指摘された。そしてこのことは同じ古典詩歌である『詩経』における〈恋愛〉メタファーと比較すれば一目瞭然である。例えば尹梓充（2017）によれば、『詩経』における《恋愛は音楽的調和》《恋愛はもらうこと》《恋愛は贈り物》といった〈恋愛〉メタファーはかなり積極的なイメージを帯びているという。これに対して、『万葉集』では《恋愛は命》《恋愛は病気》《恋愛は隠れるもの》《恋愛は苦しいもの》というメタファーが用いられ、みずからの哀傷や苦衷、恋の一途さが詠じられている。また、「恋」の万葉仮名である「孤悲（こい）」という表記

も、万葉時代の〈恋愛〉の悲しさを裏付けていると考えられる。このことは換言すれば、「恋」の万葉仮名である「孤悲」はわれわれに万葉人の持っている〈恋愛〉のイメージをありのままに示している(钱昕怡2000)と考えられる。そして、『万葉集』で表現される〈恋愛〉のイメージは、苦しみ、憂鬱、悲しみといった感情的な特徴を持っており、日本の伝統的な「もののあわれ」の美意識を表していると考えられる。例えば、邱紫华(2004)では、「美意識としての「あわれ」とは、自然物の無常、変化、死去に直面して人々が生み出す悲しい感情と深い嘆きである。「あわれ」は人間の精神、感情の発露で、和歌の中で最も表現された感情であり、日本の感情世界で支配的な感情である」と述べられており、日本人の感情世界における「あわれ」の重要性を示している。このように、和歌がよく伝えようとしている「あわれ」の感情が、『万葉集』における悲観的〈恋愛〉メタファーを動機づけているといえる。

最後に、『万葉集』における〈恋愛〉メタファーは中国からの影響を多く受けているという特徴が見られる。例えば、严绍璠(1999)では「万葉」という言葉を考察した結果、『万葉集』の最初の言葉である「万葉」は、古くから伝わる中国文化から生まれたもので、日本文化史上最初の歌集である万葉集と、「漢文学」の祖先である中国文化との深く広いつながりを示したと指摘されている。つまり、『万葉集』はある意味で必然的に中国文化の影響を受けているといえる。また、中西(2007: 51)では、『万葉集』に収められている7～8世紀の日本の和歌は、『詩経』から漢、魏、六朝、唐の初期に至るまで数多くの詩歌の影響を受けていると述べられている。さらに、王晓平(1981)によれば、とりわけ、『詩経』からの影響は深く、「比興」という修辞手法や、漢語俗語の使用、民歌への好み、社会生活を反映するという写実の精神は『万葉集』に受容されているという。そしてこのことは本稿の考察からも確認できる。例えば、4.1や4.4で検討しているように、『恋愛は植物』『恋愛は旅』などのメタファーは『万葉集』と『詩経』の両方に用いられている。そして、5で考察した結果、〈天の川〉〈梅〉〈鶴〉〈雁〉〈鹿〉〈髪〉といったイメージの使い方は中

国文化の影響を強く受けているという点が明らかになった。例えば、中国で発生した七夕伝説における重要な要素である〈天の川〉は、恋人たちを兩岸に引き離す役割を果たしているといえる。また、万葉歌人は中国の文学作品を模倣して〈梅〉に愛情や友情を託して歌ったという（閻利華2014）。そして、和歌で「恋の使者」として用いられた〈雁〉は、囚われた蘇武が雁の脚に手紙を結び、皇帝に届いた物語に因んでいると朴喜淑（2009）では指摘されている。さらに、長く豊かで黒い〈髪〉を評価する美意識は中国文学における「黒髪」が源泉となっていると中西（1995）では述べられている。以上に挙げた具体例は、いずれも『万葉集』における〈恋愛〉メタファーは中国文学・文化の影響を受けている証拠となりうる。

7. おわりに

本稿はCMTの観点から、『万葉集』における〈恋愛〉メタファーとその特徴について考察し次のような結果が得られた。（1）『万葉集』から〈恋愛〉に関する和歌358首を抽出し大堀（2002）の分類基準に基づいて分析した結果、『万葉集』における〈恋愛〉メタファーは大きく慣習的メタファーとイメージ・メタファーに大別できることが明らかになった。（2）万葉人が〈恋愛〉を表すのに自然物のイメージ・メタファーを好んで用いたり、悲観的なものをよく用いたり、さらに中国文化の影響を受けたりするといったことも解明された。

【注】

- 1 本稿では〈 〉で概念 (concept) を示し、《 》で概念メタファーを示す。従ってここでの〈恋愛〉はあくまで概念上のものであり、言語レベルにおいては「恋」や「愛」などに具現化される。
- 2 本稿では、概念メタファーを略してメタファーと呼ぶ。

【参考文献】

- 韓涛 (2009) 「メタファーのスコープに関する一考察：中国語の“火”の場合」『ことばの科学』(22), pp.61-78.
- 栗原弘 (2012) 『万葉時代婚姻の研究：双系家族の結婚と離婚』刀水書房.
- 古橋信孝 (1987) 『古代の恋愛生活：万葉集の恋歌を読む』日本放送出版協会.
- 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『新編日本古典文学全集』小学館.
- 西村亨 (1964) 「恋から見た恋歌」『芸文研究』(17), pp.1-12.
- 大窪梅子 (1970) 「万葉の寄物抒情歌—植物を主として—」『国士館大学人文学会紀要』, (2), pp.165-179.
- 大谷歩 (2016) 『万葉集の恋と語りの文芸史』笠間書院.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会.
- 辰巳正明 (1997) 『万葉集と比較詩学』おうふう.
- 中西進 (1986) 『万葉のこぼと四季』角川書店.
- 中西進 (1995) 『万葉集の比較文学的研究』東京印書館.
- 朴喜淑 (2009) 「万葉集の雁考」『百舌鳥国文』(20), pp.117-132.
- 頼國文 (2012) 「『万葉集』の梅とその取り合わせの成立」『学芸古典文学』(5), pp.3-15.
- 和田明美 (1996) 『古代の象徴表現の研究：古代的自然把握と序詞の機能』風間書房.
- 櫻井満 (1995) 『万葉集の民俗学的研究』おうふう.
- Grady J. E. (1997) *Foundations of meaning: Primary metaphors and primary scenes*. University of California, Berkeley.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 韓涛・彭語心 (2021) *The Love Metaphor of Plant in Chinese and Its Cognitive Grounding* 海外英語, (22) : 113-114.
- 韩涛, 付林瑶 (2019) 日语“草”的隐喻思维及文化内涵. 齐齐哈尔大学学报 (哲学社会科学版), (11) : 17-19.
- 韩涛・吴涵或 (2021) 论日本文学中的爱情隐喻及其特征. 语文学刊, (05) : 101-110.
- 韩涛 (2017) 隐喻与思维：汉日英三语中的概念隐喻研究. 外语教学与研究出版社.
- 钱昕怡 (2000) ‘孤悲’——从“万葉集”‘恋’歌看日本人的恋爱意识. 日语知识, (08) : 26-27.
- 邱紫华 (2004) 日本和歌的美学特征. 华中师范大学学报 (人文社会科学版), (02) : 58-62.
- 束定芳 (2000) 论隐喻的基本类型及句法和语义特征. 外国语 (上海外国语大学学报), (01) : 20-28.
- 王晓平 (1981) 《万叶集》对《诗经》的借鉴. 外国文学研究 (04) : 54-58.
- 闫秀 (2020) 《万叶集》中鹤意象的中国文学体现. 日语学习与研究, No.209 (04) : 118-127.
- 严绍璽 (1999) 《万叶集》的发生学研究——兼评西乡信纲的《日本文学史》. 日本学刊, (01) : 97-114.

- 阎利华 (2014) 《万叶集》中的咏梅和歌. 北方工业大学学报, (02) : 62-66+87.
- 尹允镇 (2005) 日本古代诗歌文学与中国文学的关联. 黑龙江朝鲜民族出版社.
- 尹梓充 (2017) 从认知视角看《诗经》中的概念隐喻. 北京外国语大学硕士学位论文.
- 张继文 (2009) 雪与花：日本短歌中的隐喻认知考察. 解放军外国语学院学报 (03) : 105-109.
- 中西进・王晓平 (1995) 智水仁山：中日诗歌自然意象对谈录. 中华书局.
- 中西进 (2007) 《万叶集》与中国文化. 中华书局.